資料館ノート　第8号　　平成９年３月16日発行

民俗芸能―演じられた場を通じて―

江東区深川江戸資料館

現在、江東区につたわる民俗芸能として、「深川の力持」・「木場の角乗」・「木場の木遣」・「富岡八幡宮の手古舞」・「砂村囃子」があり、力持、角乗、木遣は東京都の、砂村囃子は江東区の無形民俗文化財の指定を受けています。

今回は特に、深川の民俗芸能、なかでも〝仕事場の中から生まれた技〟ということで力持・角乗・木遣の三つを中心に紹介します。そしてこれら仕事場のなかの技が〝観せる芸能〟へと成熟していく様子を、これらの芸能が演じられてきた背景（＝場）に注目してまとめてみました。

1　倉の街・木の街―仕事場の技―

現在、私達が力持や角乗を観ることができるのは、〝民俗芸能〟として上演される舞台のような場が多くなっています。しかし、これらは初め、佐賀町周辺での倉庫街の力競べ、木場川並の娯楽など〝仕事場での余技〟としての面が強かったようです。つまりこれらの民俗芸能の伝承に深川の産業的な特色が深くかかわっているということになります。具体的には、倉庫街(永代・佐賀など)の力持、木場の角乗・木遣となります。

①力持（倉庫街の力競べ）

江戸時代、永代・佐賀・福住・深川・清澄の各町には、諸国から運ばれてくる米・酒・醤油・雑穀等を入れておく倉庫が立ち並んでいました。そこで働く人々は強い力を必要とし、またその力を競い合いました。こうした人々の間で、仕事の合間に俵や酒樽などを差し上げたりする曲技が行なわれたのが力持です。それが次第に技も磨かれ、曲芸的要素も強くなりました。

②木場と川並

一方、木場は、全国の材木の集積地として機能し堀がめぐらされて、材木問屋が軒を連ねる街でした。そこで材木の仕分けや筏の回漕などに携わる人のことを川並と呼びました（木場については「資料館ノート第３号」で紹介しています)。角乗と木遣はこの川並たちによって伝えられました。

③角乗（川並たちの余技）

角乗とは、川並が堀川の上で材木を扱いながら遊戯的に行なったのが初めといわれています。水中に長さ数メートルの角材を浮かべて、その上に演者が乗り、タメ竿一本で調子を取り、材木を両足で回転させながら曲芸を演じます。

大坂では、すでに延享４年（1747）には、見世物興行の場に登場していたようですが、深川辺りでは船頭や材木屋の若者が日常的に行なっており、別に珍しいことではなかったようです。

④木遣（木場に響く掛声）

木遣は数人の川並衆が竿の先について入る鳶口を材木に引っ掛け、一斉に引き上げる際の掛声に即興的な歌や流行歌などを取り入れた労働歌でした。音頭のもとは各地の材産地で材木を挽くときにうたった木挽人夫の唄です。大正末年頃までは川並衆の間で労働歌としてうたわれておりましたが、仕事内容の変化などにより仕事場ではうたわれなくなりました。

一方で木遣は、江戸の町火消鳶職の間でも、出初め・祭礼・上棟式（建前）のときなどにうたわれ、現在に至っています。

また、辰巳芸者の手古舞にとり入れられた木遣は、富岡八幡宮の大祭の際、神輿の先導役によって今でもうたわれています。

2　見世物興行としての芸

見世物とは、場所を仕切ったり簡単な小屋掛けをしたりして金銭を取り芸などを観せることですが、江戸時代は軽業・曲独楽・からくりといった勧進興行などの見世物が盛んに行なわれ、庶民の娯楽として定着した時代でした。

力持や角乗も、見世物の一つとして両国広小路や社寺の境内など江戸の各所で行なわれました。これらが観ているものをハラハラさせ息の合った演技が観客を引き込むのは今も昔も変わらなかったことでしょう。そしてこのような場が、演技の種類を増やし技を高度にするのに影響したと思われます。

①力持の大流行

見世物としての力持の記録は、すでに『大日本大代記』の延宝２年（1674）の条にみえています。江戸時代、力持ちが大流行し新川や神田の問屋街、浅草寺境内、両国などの各所で行なわれました。女力持や子供、美少年の力持も現われ文政年間はその全盛期でした。

また、単に重いものを持つだけでなく種々の道具を使ったりして曲芸的な技術を観せる曲持へと発展し、ともに上演されました。

差し上げた石に目方や姓名を掘って社寺に奉納したものを力石といい、江東区内にも富岡八幡宮前に住んでいた中村弥兵衛の力石（富岡八幡宮・富岡１―20）や元木場材木町の金七の力石（富賀岡八幡宮ほか・南砂７―14）などたくさんの石が残されています。

②山の手での角乗興行

角乗も見世物興行として行なわれました。山の手の人々には珍しかったようで文化文政の頃は特に盛況でした。『江戸繁盛記』や『遊歴雑記』には帆掛船の作り物などを浮かべた池で行なったその演技の様子が記されています。新宿角筈の十二社権現の池や両国河岸などでも上演されましたが天保のころから衰退してしまいました。

3　力持・角乗・木遣の現在―文化財として―

仕事場の余技として行なわれ即興的だったこれらの技は、見世物興行の流行などの社会的背景もあって、さまざまな道具や高度な演技が生み出され次第に芸能的要素が強くなりました。

以後、明治・大正時代にはいったん衰微してしまったものの、現在は、無形民俗財に指定されるなど、それぞれの保存会の人々が後継者の育成と技術の保存に努めています。また毎年１月には江東区教育委員会の主催で「江東区新春民俗芸能大会」が催され、会場となっている深川江戸資料館小劇場にはたくさんの観客が訪れます。

現在は、仕事場の余技や見世物として演じられた時代とは異なりますが、深川の民俗芸能として親しまれ受け継がれています。